11世紀ビザンツ属州貴族と地域社会,皇帝政府：アドリアノ-ブルとマケドニア貴族をめぐって(1993年度歴史学研究会大会報告：歴史のなかの情報)：(古代史部会：古代における"在地社会"の展開と国家-3-〔含討論要旨〕)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00000011

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

11世紀ビザンツ属州貴族と地域社会，皇帝政府——アドリアノープルとマケドニア貴族をめぐって——

根津由喜夫

はじめに

11世紀は，一千年におよぶビザンツ帝国の歴史において重要な転換期と言われている。この間に帝国は，バシレイオス2世治下の集権的国家体制から，コムネノス朝の下での「家産国家」体制に変貌を遂げたのである（拙稿「アレクシオス1世とビザンツ軍事貴族——コムネノス朝支配体制の組織原理」『西洋史学』151号，1989，1－17頁，同「10世紀ビザンツ帝国の権力構造——人的関係の視角から」，『富山大学人文学部紀要』17号，1991，53－76頁）。換言すれば，それは，10世紀後半から11世紀前半にかけての対外的発展と国内平和の時代に地域社会に確固とした地歩を築いた属州貴族層が，11世紀後半

の動乱と激しい権力闘争の時代を経て，彼らの在地における既得権益を保証するコムネノス朝政権の下に結集する過程でもあった（cf. 拙稿「ビザンツ貴族と皇帝政権——コムネノス朝安定化への過程」『史林』71巻3号，1988，1－40頁）。

今回の報告の課題は，そうした一連の過程を，アドリアノープルを本拠とするマケドニア貴族たちの動向を通じて検証し，地域社会と中央政府の相互関係を考察することである。ここでアドリアノープルという町を取り上げるのは，この町がこの時期，2度の大規模な反乱の舞台となったためだ。我々は，両者を比較・検討することで，地域の指導的家門の浮沈・転変だけでなく，地域社会に対する属州貴族層の支配の深化を計測することができるのではないだろうか。史料が帝都コンスタンティノープルに偏在する状況のなかで，属州反乱は，中央と地方との間に存在する矛盾を顕在化させるばかりではなく，反乱が勃発し，それが大きな運動に発展していく過程で，地域社会内部の緊張関係や社会的結合関係をも，我々にかいま見させてくれる絶好の機会と言えるのである。いわば，今回の報告は，アドリアノープルとマケドニア地方というビザンツ帝国の一地方の視座から，11世紀ビザンツの国制転換の過程を跡付ける試みと言えよう。

I　11世紀半ばのビザンツ帝国とマケドニア地方

まずはじめに，今回の報告の舞台となるアドリアノープルの町がビザンツ史上に占める位置（cf. T. E. Gregory & N. P. Sevčenko, "Adrianople", in A. Kazhdan ed., *The Oxford Dictionary of Byzantium*, New York–Oxford, 1991, p. 23）と，議論の出発点となる11世紀半ばのビザンツ世界の状況を概観しておこう。

トラキア地方の平野部のほぼ中央に位置するアドリアノープルは，古来，交通の要衝，重要な戦略拠点としての役割を担ってきた。7世紀以降，この町は，アヴァール人やスラヴ人など北方から侵入する敵から帝都コンスタンティノープルを守る要塞都市としての任務を負うことになる。8世紀末，テマ＝マケドニアの新設に伴い，アドリアノープルはこのテマの首府となり（以後，この一帯はマケドニアと呼ばれるようになる），さらに9世紀から10世紀にかけて対ブルガリア戦争の前進拠点，兵站基地としての役割を果たすことで，この都市の軍事的性格はいっそう強められていった。

10世紀後半，戦況の好転と時を同じくして，聖母昇天祭に町の城外で定期市が開かれる（Ioannes Scylitzes, *Synopsis historiarum*, ed., I. Thurn, Berlin–New York, 1973, p. 346）など，都市の経済活動も活発になる。しかし，依然として，この町最大の「地場産業」は軍隊だった。対ブルガリア戦がビザンツ側の攻勢に転じるなか，この町には莫大なカネ，人，物資が流れ込んだのである。この時期，ビザンツ軍の中核は，農兵主体のテマ軍から職業軍人で構成されるタグマタ軍へと大きく軸を移しつつあったが，アドリアノープルは，こうした変革を飛躍のさらなるバネとし，バルカン方面の最高司令官の常駐する，西部属州で最大規模の軍事都市に成長したのであった。

こうしたなか，10世紀後半以降，アドリアノープルの軍幹部層が土着し，属州貴族となる事態が生じた。彼らの不動産取得の経緯については詳らかではないが，おそらく，国家から給付された俸給を土地に投資したり，あるいは軍事的功績への褒賞として所領を授けられたことが考えられるだろう（属州軍人の財産形成に関しては，S. Stavrakas, *The Byzantine Provincial Elite : A Study in Social Relationship during the Ninth and Tenth Centuries*, Ph. D. thesis, University of Chicago, 1978, pp. 14－22を参照）。

彼らは，これ以後，数世代にわたって，西方軍に多くの将校を供給し，西方属州軍に確固たる基盤を築き上げることになる。彼らの出自は，ギリシア系の他，アルメニア系やスラヴ・ブルガール系など実に多彩だが，こうした出身民族の枠を越え，彼らは互いに通婚を重ね，11世紀前半には，「マケドニア軍事貴族家門」とも称すべき門閥集団が形成される。彼らは，アドリアノープルを離れ，帝国各地で軍務に就き，その際，他地域の有力貴族と親しく交わることも珍しくはなかった。にもかかわらず，コムネノス朝成立以前，彼らが小アジア出身の家門と縁組みしている例は，ほとんど確認できない。彼らは，

マケドニア貴族の仲間内で婚姻を重ね，凝集性を高めていったのである（cf. J-C. Cheynet, *Pouvoir et contestation à Byzance (963-1210)*, Paris, 1990, pp. 220, 232f)。

彼らマケドニア貴族のもうひとつの特徴は，テマ発足以来の伝統として，彼らがアドリアノープルという都市と密接な関係をもち，基本的にこの町の城壁内に本拠を有していた，ということだ。このことは，農村部に居館を構えていたと思われる小アジアの彼らの同輩たちとは対照的な事実である（M. Angold, "The Shaping of the Medieval Byzantine 'City'", *Byzantinische Forschungen*, 10, 1985, pp. 1－37, esp. p. 8)。歴史家ミカエル＝プセルロスは，「マケドニア人の多くは，強情や無分別を悦ぶ輩であり，軍人としての質朴さよりも，都会的な道化芝居に慣れ親しんでいる連中だった」(Michael Psellus, *Chronographie*, éd., E. Renauld, 2vols, Paris, 1926-1928 (1967), II, p. 22）と非難しているが，都市生活との親密さこそが，マケドニア軍事貴族の特質だったのである。アドリアノープルの城壁内には，多くの有力家門が屋敷を構え，町の運命は，こうした有力家門間の相互関係や集団の意志に大きく影響されることになった（バルカン貴族と都市の親和性に関しては，M. F. Hendy, *Studies in the Byzantine Monetary Economy c. 300-1450*, Cambridge, 1985, pp. 78-90も参照)。

首都の皇帝政府にとって，この大軍事都市を十全に把握することは重要な課題だった。11世紀半ばに至るまで，西部方面軍総司令官に任じられた軍人のなかに，バルカン出身者は一人も認められない（J-C. Cheynet, "Nouvelle hypothèse à propos du domestique d' Occident cité sur une croix du Musée de Genève", *Byzantinoslavica*, 42, 1981, pp. 197-202の歴代西方軍総司令官のリストを参照）が，このことは，西方出身の司令官が軍の一般将兵と一体になって，中央の命に背く事態を，皇帝政府が危惧していたことを示している。これに加え，皇帝政府は，アドリアノープル内部の有力家門間の対立を煽り，一方の党派に肩入れすることで，彼らの動きに統制を加えようともしていたのである。

一方，マケドニア貴族たちにしても，皇帝政府の提供する官位・官職と，それに付随する年金・俸給が彼らの富と威信の源泉である限りにおいて，国家に対する依存的体質から脱却できず，彼らと国家との間には時に緊張を孕みつつも，相互依存的な関係が続くことになった。

11世紀半ば，こうした両者の関係に変化の兆しが生まれる。1018年に第一次ブルガリア帝国が滅亡したのを分水嶺として，バルカンにおける軍事的緊張は，大きく緩和されたのである。フランスのビザンティニスト，ポール＝ルメルルは，この時代のビザンツを特徴付けるキーワードとして「動員解除 démobillisation」と，「財政至上主義 fiscalité」という2つの用語を提示している（P.Lemerle, "Byzance au tournant de son destin", dans Lemerle, *Cinq études sur le XI siècle byzantin*, Paris, 1977, pp. 249-312 ; Id., *The Agrarian History of Byzantium from the Origins to the Twelfth Century : The Sources and Problems*, Galway (Ireland), 1979）が，まさに平和が到来したこの時代は，膨れあがった軍隊が削減され，税収の大半が帝都コンスタンティノープルに流れ込んだ時代として特徴付けられるのである。換言すれば，帝国全土で徴収された租税が，軍費として地方に還流せず，首都に集中する状態が生み出されたと言えよう。しかも，中央政府は，租税徴収のコストを切り下げるべく，徴税請負制を大幅に導入した。要するに政府は，徴税活動が円滑に進んでいる限りにおいて，属州統治に関する熱意を著しく減退させていたのである。

平和の到来と中央からの介入の減少は，地域経済の活性化にプラスに作用した。従来，政府の厳しい統制下に置かれ，帝都で独占的に製造されていた絹織物が，この時期，テーベなどギリシア諸都市で生産されるようになる（E. Weigand, "Die helladisch-byzantinischen Seidenweberei", in *Εἰς μνήμην Σπυρίδωνος Λάμπρου*, Athens, 1935, pp. 503-514)。また，低コストの造船技術が普及し，沿岸航路が賑わったことも最近の研究で明らかになった（Angold, "The Shaping of the Medieval Byzantine 'City'", p. 30)。属州貴族層は，所領の余剰農産物を売却し，あるいは地方都市の手工業生産に投資することで，自らの経済的地位を強めようとして

いたのである。

しかし，その反面，中央政府による地方駐屯軍経費の削減と軍の一部解散，俸給のカットといった措置は，高級軍人としての彼らには大きな痛手となった。1047年に勃発したレオン＝トルニキオスの反乱は，まさにこうしたマケドニア貴族たちの不満を反映した事件と言えるのではなかろうか。

II　レオン＝トルニキオスの反乱

この反乱の原因については，やや不透明の部分が残るが，ジャン＝ルフォールの研究（J. Lefort, "Rhétorique et politique : Trois discours de Jean Mauropous en 1047", *Travaux et Mémoires*, 6, 1976, pp. 265–303）などを参考に，事件の経過を復元すると次のようになる（他に，S. A. Kamer, *Emperors and Aristocrats in Byzantium*, 976–1081, Ph. D. thesis, Harvard University, 1983, pp. 258–271も参照）。

ことの発端は，ときの皇帝コンスタンティノス9世モノマコス（在位1042–1055）が，1047年初頭に降伏した大量のペチェネグ人をドナウ南岸の旧ブルガリア地方に入植させることを決定したことにあった。皇帝は，入植したペチェネグ人に税を課して歳入増を目論むと共に，彼らに国境地帯の警備を委ね，それによって余剰となるバルカン駐屯の正規軍の一部を解雇したのである。この措置は，ペチェネグ人に対して強硬な姿勢をとるよう要求していた西方軍人の神経を二重に逆撫でするものだった。1047年春に起きた騒動はすぐに鎮められたものの，彼らの不満は収まらず，彼らは好機の到来を待ち続ける。

同年秋，皇帝に忠実な小アジア駐屯軍が東部国境に出征した機に乗じ，彼らは全面的な反乱に立ち上がった。彼らは，マケドニア貴族の一員で，春の騒ぎの首謀者と目されて逼塞を余儀なくされていたレオン＝トルニキオスを9月14日に密かに都から脱出させ，反乱軍の首領として擁立する。彼は，コンスタンティノス9世帝の母方の又従兄弟にあたり，こうした血統の「貴種性」も，彼が対立皇帝に選ばれた主たる要因のひとつだったと思われる。

アドリアノープルに到着したトルニキオスは直ちに反乱軍の組織に着手した。歴史家ヨハネス＝スキュリツェスによれば，「……彼（＝トルニキオス）は，秘かに，少しずつ，以前からアドリアノープルにいて，軽視され，怠惰にしていた将軍たちを手下にした。そして彼らや自己の親族たちを通じて，マケドニアやトラキアのタグマタを指揮していた人々や，暇をもて余していた兵士たち，そして戦利品獲得や掠奪の好きな連中を籠絡して，充分な兵力を組織した」（Scylitzes, p. 439）のである。ここで言う「怠惰な将軍」や「暇をもて余した兵士」が，モノマコス帝に解雇された将兵を示しているのは明白だ。トルニキオスは，こうした不満派軍人を糾合し，さらに自らの地縁・血縁を利用して，正規軍の将校たちをも味方に引き入れたのである。そうした人々のなかには，「彼（トルニキオス）の親族の将軍」であるヨハネス＝ヴァタツェス（Michael Attaleiates, *Historia*, ed., I. Bekker, Bonn, 1853, p. 29）や，「西方のタグマタの指揮官で彼と血縁関係にあった」マリアノス＝ブラナス，テオドロス＝ストラボミュテス，ポリュスらが含まれていた（Scylitzes, p. 441）。他に，アドリアノープルの有力家門のひとつ，グラバス家も，メンバーに加わっていたらしい（Scylitzes, p. 442）。集結した軍勢によって皇帝として歓呼されたトルニキオスは，彼に加担した有力者たちに軍指揮官や幕僚，枢密顧問などの役割を割り振り，軍の陣容を整えたのである（Psellus, II, p. 18）。

なお，ここで興味を惹かれるのは，反乱に動員された民衆たちに関する情報だ。史家ミカエル＝プセルロスの伝えるところによれば，トルニキオスは，貢租を免除し，掠奪を許して，戦利品を我が物にするのを認めることで，「多くの大衆（τὸ πολὺ πλῆθος）」の支持を獲得したという（Psellus, II, p. 18）。スキュリツェスの言う「掠奪好きの連中」とプセルロスの「大衆」が一致するのは間違いないだろう。年代記作家の言葉遣いは漠然としていて，彼ら「大衆」がアドリアノープルの一般市民を指すのか，それとも周辺農村部の住民を指すのかは判然としない。だが，重要なことは，彼ら民衆層が反乱に参加したのは戦利品目当ての物質的欲望を刺激されたためであり，反乱の中心メンバーであるマケドニア軍事貴族たちに社会的に従属していた結果では何

らなかった，ということである。その限りにおいて，彼らと，トルニキオスら貴族層とを結ぶ紐帯は極めて脆弱だったと言えるだろう。反乱軍のこうした組織上の弱点は，やがて暴露されることになる。

アドリアノープルを出撃した反乱軍は，帝都コンスタンティノープルを攻囲した。ところが，彼らは，期待していた都の内部からの協力を得ることはできなかった。攻城兵器と艦隊をもたぬ反乱軍にとって，武力で都を攻略するのは不可能であり，城壁を挟んでの睨み合いが何週間も続くことになる。攻囲戦が長引くにつれ，反乱軍の士気は低下し，陣中から脱走する者が続出した。トルニキオスはやむなくアルカディウポリスまで兵を引き，配下の一隊をライデストスの町の攻撃に向かわせた。ライデストスは，トラキア・マケドニア地方で唯一，主教と「同地の有力者でトルニキオスの親族（！）でもある」ヴァタツェスに率いられて，反乱軍に激しく抵抗していたのである（Scylitzes, p. 441）。

皇帝を支持する小アジアの軍勢の到着が反乱の死命を制した。ブラナス，ストラボミュテス，ポリュスら，トルニキオスの縁者の有力貴族たちもトルニキオスを見捨てて皇帝に帰順，孤立したトルニキオスは，唯一人，最後まで彼と行動を共にしたヨハネス＝ヴァタツェスと共に捕えられ，首都の城門の前で眼球を抉り取られたのである（Scylitzes, p. 442）。1047年12月25日，3ケ月に及ぶ大反乱は終わりを告げた。

レオン＝トルニキオスの反乱を振り返って，我々は，反乱を主導したマケドニア軍事貴族層と地域社会との関係について，幾つかの興味深い知見を得ることができたと思う。

第一に指摘できるのは，トルニキオスを擁立した西方軍事貴族層と一般民衆の意識が当初から遊離していたことである。民衆には，皇帝の冷遇に憤慨する軍人層に共感すべき理由は何もなかった。税の免除は，確かに彼らにとって歓迎すべきことだったと思われる。しかし，この提案自体，元手のいらぬ民衆懐柔の方便としてプセルロスが描きだしている（Psellus, II, p. 18）のに留意すれば，どれほど民衆側の欲求を反映したものと言えるのか，疑問とせざるを得ない。つまり，マケドニア貴族たちは，自分が地域にもつ社会的影響力によって住民を動員させる能力も，後者の欲求や不満を吸い上げて地域社会を結集させる能力も，この時点では未だもたず，地域住民の支持を得るためには，物質的利得をちらつかせるしか策がなかったのである。俄仕立ての反乱軍の団結力は当然のことながら低劣であり，優勢な皇帝軍が出現すれば，たちまち空中分解を遂げる運命にあった。

人的紐帯の弱体さ，という点では，反乱の中心となった西方軍人たちの間のそれも引けを取らない。トルニキオスの親族であるにもかかわらず，ライデストスのヴァタツェスが反乱軍への抵抗を貫いたこと，反乱の終盤に他の親族もトルニキオスを裏切ったことは，マケドニア貴族家門相互の結合力が彼らの通婚関係にもかかわらず必ずしも強固ではなかったことを示している。井上浩一氏は，最近の研究で，「イエ」の外部の親族に警戒感を抱きつつ，「イエ」を守るため，親族・縁者との連携を模索しつつあった11世紀ビザンツ貴族の姿を描きだしている（井上浩一「遺言状からみた11世紀ビザンツのイエ」前川和也編著『家族・世帯・家門——工業化以前の世界から』ミネルヴァ書房，1993，96–124頁，特に119頁）が，トルニキオスの反乱とその失敗は，そうした族的結合がこの時点で既に形成されつつあったこと，しかし，それは未だ未熟な状態に留まっていたこと，を映し出していた。この時期のマケドニア貴族は，国家からの官位・官職の授与に依存する緩やかな連合体にすぎず，地域社会に深く根を下ろして中央と対決するほどの力量も意志も有してはいなかったのである。

III　ブリュエンニオス家の台頭

1047年のトルニキオスの反乱と，その翌年に勃発した大規模な対ペチェネグ戦争は，アドリアノープルに拠るマケドニア貴族層内部に重要な地殻変動を生じさせた。反乱の首謀者を出したトルニキオス家の勢力が失墜したこと（マルマラ海沿岸ダオニオンにあった同家の所領は，国家に没収されたらしい。cf. P. Gautier éd., *Le typikon du Christ Sauveur Pantocrator*, Paris, 1974, p. 115 ; Cheynet, *Pouvoir et contestation*, p. 374）に加え，ペチェネグ人

との戦闘で，トルニキオスの反乱に参加し，後に皇帝に帰順したテオドロス＝ストラボミュテスとポリュスが戦死する（Scylitzes, p. 467）など，総じてトルニキオスの乱に参加した既存の有力家門の多くが打撃を被ったのである。

こうした状況のなかで，旧トルニキオス派に代わって，一人の有能な軍人がアドリアノープルの主導権を握ることになった。その名はブリュエンニオス。彼は，皇帝から外人傭兵部隊と弓騎兵部隊の指揮を委ねられ，ペチェネグ人を繰り返し撃破し，戦況の挽回に大きく貢献した（Scylitzes, pp. 471–473）。彼の家系は9世紀に遡る古い家柄であった（Constantinus Porphyrogenitus, *De administrando imperio,* ed., G. Moravcsik & R. J. Jenkins, Washington D. C. 1967, p. 232）が，10世紀には同家の成員は史料上から消え，ブリュエンニオス自身，それまでの経歴はほとんど知られていない。トルニキオスの乱の際の彼の動向も不明である。しかし，彼はライデストスのヴァタツェス家と縁戚関係にあったことが知られ（Attaleiates, p. 244），の点から，反乱には深く関わってはいなかったと推測される。また，後に皇帝になった小アジアの貴族，ニケフォロス＝ボタネイアテスは，かつて彼とヘタイレイア（皇帝親衛隊）の同僚だったと史書のなかで自ら語っている（Nicephorus Bryennius, *Historiarum libri quattuor,* éd., P. Gautier, Bruxelles, 1975, p. 263）のも，注目に値する。同じ史書は，別の箇所で，ヘタイレイアを貴族の子弟が軍の要職に就く前の予備的階梯として位置付けており（Bryennius, p. 77），しかもボタネイアテスが将軍として初めて登場するのは，ブリュエンニオスの軍司令官就任とほぼ同時期の1053年のことだった（Attaleiates, p. 39）から，両人ともそれ以前，コンスタンティノス9世の親衛隊員として皇帝に近仕していた可能性が極めて強い。皇帝が，帝国軍の最後の切札というべき精鋭の外人傭兵部隊の指揮官に彼を抜擢したのも，腹心である彼の才能と忠誠心を深く信じていたからだと考えれば，得心がいく。

いずれにしても，今回の彼の軍司令官就任と軍功は，ブリュエンニオス家をアドリアノープル最高の家門に押し上げる契機となった。その後，彼は，皇帝の命を受け，2度にわたってマケドニア人部隊を率いて小アジアにおける軍事作戦に従事している（Scylitzes, pp. 479f, 484）。このことは，中央政府が，アドリアノープルの軍勢のリーダーとして彼の地位を認知し，皇帝に忠実な彼に西方軍を掌握させることで，東方戦線への西方軍部隊の投入を円滑に行なおうとしていたことを示していた。ここでも，国家の重要官職授与に，アドリアノープル内での自らの勢威の拠り所を求める有力家門と，彼の威信を通じて西方軍の掌握を図る国家との相互依存関係が認められるであろう。

1057年，今度は小アジアの貴族たちが，皇帝ミカエル6世の冷遇に反発して，反乱を企てた。このとき小アジアにあったブリュエンニオスはこの陰謀に加わっていたことが露見し，逮捕されて眼球を抉られてしまう（Scylitzes, pp. 487f）。その直後，小アジア貴族たちは挙兵，皇帝方も対抗して兵を集め，マケドニアの部隊もこれに応じた。このとき，西方属州軍の指揮を執ったのがバシレイオス＝タルカネイオテスである（Scylitzes, p. 494）。タルカネイオテス家は10世紀末以来知られるアドリアノープルの有力家門であり（cf. Cheynet, *Pouvoir et contestation,* p. 233），皇帝政府は，ブリュエンニオスの逮捕が西方軍にもたらした動揺を，タルカネイオテス家の声望で鎮めようとしたのであろう。ちなみに，西方属州軍の最高司令官にマケドニア貴族が任命されたのは，確認できる範囲で，今回が初めてであり（1047年の反乱者レオン＝トルニキオスが反乱以前にこの職にあったと推定する Cheynet, "Nouvelle hypothèse à propos du domestique d' Occident"（前掲）の説は受け入れ難い。なぜなら，彼が論拠として示したジュネーヴ博物館所蔵の十字架の銘文にある「パトリキオスかつ西方のドメスティコス」のレオンは，トルニキオスよりも，むしろニケフォロス2世フォーカス帝（在位963–969）の弟，レオン＝フォーカスであった公算の方が高いからである。cf. L. Bouras, "The Reliquary Cross of Leo *Domestikos tes Dyses*", in M. Mullet & R. Scott ed., *Byzantium and the Classical Tradition,* Birmingham, 1981, pp. 179–187），緊迫する状況のなか，西方軍の忠誠を確保するために皇帝が思いきった決

断を下したものと想定される。

反乱の帰趨は，ニカイア近郊における決戦で反乱軍が勝利を収めたことで決した。反乱軍の首領イサキオス＝コムネノスは都に入って皇帝に即位する（イサキオス1世，在位1057–1059）。戦後の論功行賞において，視力を失ったブリュエンニオスも，イサキオス帝からクロパラテスの爵位を賜ったようだ（このことは，彼の妻アンナが，クロパラティッサの称号を帯びていることからわかる（Bryennius, p. 225）。この爵位の叙任時期に関しては，編者ゴーティエの解説（Bryennius, p. 16）も参照のこと）。この爵位は，イサキオス帝の弟ヨハネス＝コムネノスと同一のものであり，ブリュエンニオスが皇族と同格の，極めて高い待遇を得ていたことを示している。これによって，彼とその一族は，アドリアノープルにおける勢威を守り，それは，彼の息子ニケフォロス＝ブリュエンニオスに受け継がれることになった。

ニケフォロスは1071年，全西方軍司令官，つまり文字通り西方軍全体の頂点に立つ人物として初めて登場している（Bryennius, p. 107）。ときの皇帝ロマノス4世ディオゲネス（在位1068–1071）は，彼と義兄弟の盟約を結んでおり（Anna Comnena, *Alexiade*, éd., B. Leib, 3vols, Paris, 1937–1945 (1967), II, p. 196），次の皇帝ミカエル7世ドゥーカス（在位1071–1078）は彼をカイサル（副帝）に登用することを考慮する（Bryennius, p. 211）など，トルコ人の侵入で小アジア情勢が深刻化するなかで，無傷の西方属州軍を統轄するニケフォロス＝ブリュエンニオスの実力は，当時の皇帝たちも一目置かざるを得なかったのである。

1071年，全西方軍司令官ニケフォロス＝ブリュエンニオスは，もう一人の有力なマケドニア貴族ヨセフ＝タルカネイオテスと共に，トルコ人の小アジア侵入に終止符を打つべく大軍を集めた皇帝ロマノス4世の東方作戦に参加した。軍議の席上，ブリュエンニオスとタルカネイオテスは，敵をビザンツ領深く誘い込み，焦土作戦をとって消耗させた上で撃滅すべきだと主張する（Bryennius, p. 107）。この提案は，小アジアの農村地帯に多少の損害を出しても敵をできるだけ確実かつ容易に撃ち破りたい，というバルカン貴族の願望を反映したものと言えるだろう。しかし，それは，自分たちの本拠を敵の手に触れさせぬため，東部国境まで進軍して敵と相まみえることを主張する小アジア貴族たちの意向に反した意見であり，結局，自らもカッパドキア地方の大貴族家門の出身であるロマノス4世帝に退けられることになった。

この結果，ビザンツ軍は，ヴァン湖の西，マンツィケルトまで進軍し，トルコ・スルタン，アルプ＝アルスランの軍勢に決戦を挑んだ。会戦の当日，ブリュエンニオスは帝国軍左翼の指揮を委ねられ，皇帝と共に奮戦した（Bryennius, p. 115）。一方，マンツィケルト近隣の町クレアトの攻略に，帝国軍の一部を率いて向かっていたヨセフ＝タルカネイオテスは，スルタンの軍出現の報に接すると，本隊に合流するようにという皇帝の命令を振り切って，一目散に小アジア内地へ逃走する（Attaleiates, p. 158）。マンツィケルトの会戦の際に示されたこの対照的な身の振り方が，その後の二人の運命を分けることになった（Cheynet, *Pouvoir et contestation*, p. 348は，タルカネイオテスの逃亡が，ロマノス帝に反感を抱くドゥーカス家との共謀の上でなされたことを示唆している）。

この会戦でロマノス4世が敵の捕虜になったのに乗じ，一種の宮廷クーデタの末に成立したミカエル7世の政権は，戦場でロマノス帝を裏切ったヨセフ＝タルカネイオテスを重用し，彼にアンティオキア長官の職務を託した。彼の爵位もマギストロスからプロトプロエドロスに昇進している（Bryennius, p. 201）。一方，ブリュエンニオスは，ロマノス4世との親密な関係のせいか，当初はミカエル7世政権に疎んじられ，アドリアノープルに退いていたらしい。しかし，ミカエル帝も彼の実力を無視できず，カイサル任命は見送られたものの，皇帝は彼をブルガリア，次いでデュラキオンの長官に任じて，西方属州の騒擾を鎮定するために彼の軍事的才能に頼ったのであった（Bryennius, pp. 213–215）。ただし，デュラキオン長官在任時ですら彼の爵位はプロエドロスに留まり（Attaleiates, p. 241），ヨセフ＝タルカネイオテスに及ばなかった点は見逃せない。他方，アドリアノープルの長官には，ヨセフの息子カタカ

ロン＝タルカネイオテスが任じられている（Attaleiates, pp. 242f ; Bryennius, pp. 223–225)。ここには，マケドニア貴族たちのもつ軍事的能力を最大限に利用しつつ，有力家門同士を競合させ，彼らを統制しようとする皇帝の思惑がはっきりと読み取れるのである。

IV　ニケフォロス＝ブリュエンニオスの反乱

けれども，こうした綱渡りめいた皇帝政府の施策は，いかにも危うく，政局の永続的な安定を保証するものとはならなかった。しかも，当時，帝国は未曾有の危機に直面し，ミカエル７世の政府は苦しい政局運営を強いられていたのである。この時期，小アジア情勢はさらに悪化，首都の対岸にまでトルコ人が出没する有様だった。他方，ビザンツ領南イタリアはノルマン人に占領され，彼らの首領ロベール＝ギスカールはビザンツ本土侵攻の機会を窺っていた。軍事・外交費の膨張に加え，小アジアにおける徴税業務が麻痺したために，皇帝政府は極端な緊縮政策に訴えざるを得なかった。それは，軍人への俸給・報奨金のカット，ドナウ国境の城塞都市への補助金撤廃，さらに高官の財産没収など（Attaleiates, pp. 204–206)，手段を選ばぬものだった。なかでも，人々の怒りを買ったのは，ミカエル７世政府の大立者，ロゴテテース・トゥ・ドロムウのニケフォリツェスがライデストス城外に設立した穀物取引所だった。これまで，人々の自由な取引に委ねられていたトラキア産小麦は，以後，強制的に取引所に集められ，その仲介で売買されねばならなくなり，その際，法外な手数料・賦課金が課されたのである（詳細は拙稿「ライデストス穀物専売政策をめぐって――11世紀ビザンツの国家と官僚」『史林』70巻１号，1987，44–72頁を参照)。これは，いわば歳入増を図る政府の窮余の一策だったのだろうが，それまで農産物の自由取引の下に自らの土地経営を安定化させようとしていたバルカンの領主層には耐え難い代物となった。しかも，穀物取引所設立の張本人ニケフォリツェスは，政府高官の地位を利用して莫大な蓄財をしていたようなのである（Attaleiates, p. 201)。

こうした一連の政策に憤慨したアドリアノープルの軍人の一部が都に上り，兵士の俸給の欠損と為政者の放恣・貪欲を非難しようとしたとき，皇帝の側近たちがしたことといえば，配下の兵を待ち伏せさせて彼らに虐待を加えたことだけだった（Attaleiates, p. 210)。

今や，俸給カットに怒る職業軍人だけでなく，穀物専売取引で土地経営を圧迫された領主層や農民，さらに政府の無為無策のため外敵の脅威にさらされた国境地帯の住民など，属州の広範な人々がミカエル７世の政府に怨嗟の声を上げつつあった。こうした状況の下に発生したニケフォロス＝ブリュエンニオスの反乱は，一部の不満派軍人の独り相撲に終始したレオン＝トルニキオスの反乱とは異なり，地域社会全体を糾合し，属州住民を一丸として展開しうる気運を生み出したのである。

ニケフォロス＝ブリュエンニオスの反乱に関しては，当のニケフォロスの孫で同名のニケフォロス＝ブリュエンニオスと，ミカエル＝アッタレイアテスが詳しい情報を残しており，とりわけ前者はアドリアノープル，後者は自分の所領のあったライデストスにおける事情に精通していた。そこでまず，この二つの町で起きた出来事を同時進行的に通覧しながら，反乱の全貌を復元してみることにしよう。

今回の反乱の発端も，以前のトルニキオスの乱やイサキオス＝コムネノスのそれと同様，政府の冷遇に対する軍人の不満にあった。ニケフォロス＝ブリュエンニオスの弟ヨハネスは，対ペチェネグ戦に手柄を立てたにもかかわらず，当てにしていた褒賞を政府から授けられないことを不服として，兄ニケフォロスを対立皇帝に擁立することを思いついたのである。アドリアノープルに戻った彼は，デュラキオンにいる兄に書簡を送り，しきりに決起を促した。ニケフォロスは，当初，弟の提案に逡巡するが，皇帝が彼をデュラキオン長官から更迭し，後任の長官に彼の逮捕と都への連行を命じるに至って，ついに反乱に踏み切ることを決断する。1077年秋のことであった（Bryennius, pp. 217–219)。

この間，ヨハネスは，アドリアノープルにおける多数派工作に乗り出していた。「彼（＝ヨハネス）は，今や町の主だった人々全てを，この問題について自分の味方になるよう説得し，アドリアノープル

全体を，彼の陣営に引き入れた」とブリュエンニオスは伝えている（Bryennius, p. 223）。アッタレイアテスによれば，ヨハネスは「西方軍の一部を自分の陰謀に引き入れ，多数のヴァリャーグ人やフランク人も，説得によって，自分の兄のために組織し，味方にした」のである（Attaleiates, p. 242）。別の箇所で史書は，「部隊長（*λοχαγός*），軍団長（*φαλαγγάρχης*）そして将軍（*στρατήγος*）自体を含むトラキアとマケドニアの全軍」が反乱に加わったことを報じている（Bryennius, p. 227）ので，ヨハネスがアドリアノープルで味方に引き入れた「町の主だった人々」には，何よりも，この町に駐屯する軍隊の幹部が重きをなしていたように思われる。

だが，こうしたヨハネスの工作に頑強に抵抗した有力者も存在した。ブリュエンニオス家の対抗勢力として，皇帝から町の長官に任じられたカタカロン＝タルカネイオテスがそれだ。彼は反乱を鎮圧するため，支援の軍隊を送るよう都の皇帝とロゴテテースに懇請する。ところが後者は「手許に軍隊がなかったのか，それともこの問題を不注意に扱ったためか」全然，援軍を送ろうとはしなかった。タルカネイオテスはなおも数日間抵抗を続けたが，町全体がブリュエンニオス支持で固まり，彼自身の身に危険が迫っているのを認識し，ブリュエンニオス兄弟の母親の和解提案を受け入れ，彼もまた，反乱者の陣営に身を置くことになった。その際，両家の同盟の証として，ヨハネス＝ブリュエンニオスの息子と，タルカネイオテスの姉妹ヘレナの結婚の約束が取り交わされた（Bryennius, pp. 223–225）。かくして，アドリアノープルの町は反乱一色に塗りつぶされたのである。

同じ頃，ライデストスの町では，ブリュエンニオスの縁戚にあたるヴァタツェス家の女当主（彼女は，トルニキオスの反乱軍から町を守ったヴァタツェスの直系の子孫と思われる）が，町をブリュエンニオス陣営に引き入れるために奔走していた。当時，自分の所領の検分のため，この町に滞在していたアッタレイアテスは，次のように伝えている。

「彼女は，ひそかに，ライデストス市民の多くを籠絡させ，彼らを贈り物や数々の約束で自分の方へ鞍替えするよう説得し，直筆の書状や誓約を使って，陰謀の一味を組織したのである」（Attaleiates, pp. 244f）。

ヴァタツェナの一味が旗揚げの決行日と定めた日の前夜，この企てに加わっていた有力者の一人から，反乱の計画を漏らされたアッタレイアテスは驚愕し，直ちに町を脱出することを決意した。ラバ，馬，従者たちに必要な荷物を負わせてアッタレイアテスは人目を避けて城門に急ぐ。しかし，そこは鉄の閂が十文字に架けられ，ヴァタツェナ配下の重装兵が警備に就いていた。もちろん，それは，市外に陰謀の企てが漏れることを防ぐための方策だった。市門の前でアッタレイアテスは警備の兵と押し問答を繰り返し，もし通さないのならば，ヴァタツェナに戦いを挑むと脅して，ようやく城門を開かせることに成功した（Attaleiates, p. 245）。この部分は，文官のアッタレイアテスも，武装可能な相当数の従者を擁していたこと，ヴァタツェナのもつ私的武力＝家兵の力は，それと比べて圧倒的に優勢とは言えなかったことが窺える興味深い箇所である。

ライデストスを出たアッタレイアテスの一行は，一路，都への道を急いだ。しかし，その道すがら，彼が目にしたのは全く予想に反した光景だった。彼の言葉によれば，「私は，そこが全き静けさで満ちているのを見いだした。皇帝の軍隊は冬営のため他の町々に散っており，いかなる騒擾も窺えなかった」のである（Attaleiates, p. 245）。

都に入ったアッタレイアテスは自宅にも寄らず，まっすぐ皇宮に向かい，ロゴテテースのニケフォリツェスと面会する。彼は後者に反乱の状況を報告すると共に，直ちに必要な策を講じるよう進言した。ところが，ニケフォリツェスは，笑ってこの話を聞き流してしまう（Attaleiates, pp. 245f）。タルカネイオテスの場合と同様，この時点での取り組みの遅れがミカエル７世政府の命取りとなった。

一方，デュラキオンから少数の手勢と共にアドリアノープルへの道をたどっていたニケフォロス＝ブリュエンニオスは，トラヤノポリスで弟のヨハネスが率いる西方属州軍と落ち合った。彼は弟の用意した皇帝の徽章を身に帯び，軍隊に歓呼されて対立皇帝としての名乗りをあげた。この光景について，アッタレイアテスの語るところにしばし耳を傾けてみ

よう。

「今やブリュエンニオスは，トラヤノポリスに到着し，彼の弟，および彼に味方したフランク人とマケドニア人の軍隊と落ち合った。彼の許には，皇帝の徽章，軍車を牽いた馬，深紅の皇帝用短靴がもたらされた。彼は，全員を多くの宣誓や取り決めによって団結させ，最後の息を引きとるまで，彼をないがしろにせぬことを誓わせた。このようにして多くの歓呼を浴び，多数の警備兵に囲まれながら，彼は緋衣を受け取り，足許を深紅の靴に改め，極めて傲慢かつ僭越にも，緋衣に身を包み，軍車に乗って，兵隊たちの歓声と大騒ぎと共に，アドリアノープルへ向かったのである」(Attaleiates, pp. 246f)。

1077年11月，意気あがる一行は，アドリアノープル市民の熱烈な歓呼を受けながら町への入城を果たした（Attaleiates, pp. 247f ; Bryennius, p. 231)。

これとほぼ時を同じくして，ライデストスにおいても反乱の幕が切って落とされた。ヴァタツェナのイニシアティヴの下，人々はブリュエンニオスを「皇帝」と宣言した。彼らはまず「天下の害悪かつ矛盾の種」つまり現政権の圧政の象徴だった穀物取引所を大地に打ち倒して気勢を上げた。さらに彼らは近隣のパニオンの町を攻撃，それと同時にライデストスの港には柵や木製の足場を設えて，防備を施した。その際，町の警備と要塞化のためと称してやってきた反乱軍の将兵や外国人傭兵が，ヴァタツェナの差し金で，反乱に同調せず，町を出た人々の土地を荒らしたことは見逃せない。アッタレイアテスの屋敷と地所もこのときに掠奪を受けた（Attaleiates, pp. 248f)。まさにこの時期，ライデストスの町にはヴァタツェナの独裁支配が敷かれたかのような観を呈したのである。

ここまで，我々は，アドリアノープルとライデストスの二つの町において，反乱の準備から挙兵に至るまでのプロセスを跡付けてきた。そこから，それらがいずれの場合でも，ほぼ同じ手順を経ていたことが理解できたと思う。いずれの町でも，まず最初に，反乱首謀者が市内の有力者をひそかに勧誘，説得することから陰謀はスタートした。帝位を窺うほどの有力家門ブリュエンニオス家も，アドリアノープルでは実質的に「仲間内の第一人者」にすぎなかったのである。この町には，彼の反乱に加わったことが知られているバシレイオス＝クルティキオスやクーツォミテス（Bryennius, p. 229）に加え，衰えたとはいえ旧トルニキオス派の諸家門も健在であり，彼らの意向を諮らずに事を起こすことは不可能であった。このことは，所領経営に基づく財力，私兵の動員能力など，家産組織自体に由来する実力では，ブリュエンニオス家は他の諸家門と比べて必ずしも傑出していたわけではなかったことを暗示させている。同じことは，ライデストスにおけるヴァタツェナの立場にも言えるだろう。ブリュエンニオス家の威信は，むしろ彼らが父子二代にわたってアドリアノープル第一の家門として皇帝政府に重用され，輝かしい軍事官職を歴任したことが大きく作用していたと思われる。ここでも国家権力に反発しつつも，国家への依存体質を改められないマケドニア軍事貴族のジレンマが見い出されるのではなかろうか。

他方，市内の有力者たち内部で意見が一致した場合，彼らの集団的意志は，町の進路を事実上，決定するものとなった。アドリアノープルでは実質的にブリュエンニオス家を軸とする有力家門の成員たちの寡頭制支配体制が敷かれたのである。その際，トルニキオスの乱のときに見られたような，一般民衆を味方にするための工作が一切，認められないのは注目されるところだ。それどころか，ブリュエンニオスは，ペチェネグ人の大軍がアドリアノープルに迫ったとき，彼らを退去させるための多額の貢租を町の住民から徴収しさえしているのである（Attaleiates, pp. 261-263)。こうした措置が人々の不興を買うのは明白であろう。にもかかわらず，彼がこうした方策を貫徹することができ，しかも，その後，アドリアノープルの人心が彼から離れたとか，反乱軍の内部に亀裂が生じた，とかいった形跡が一切，認められないのはどうしてだろうか。

予想される答えは幾つか考えられる。単純に彼個人の人望に帰すもの，あるいは有力者層全体の連帯が民衆の不満を封じたと考えるもの，などである。また，トルニキオスの乱から30年という時を経て，貴族たちが民衆に及ぼす影響力，支配力がこの間に相当，強化されるに至ったことも考えられる。いず

れにしても，反乱の指導者としてのニケフォロス＝ブリュエンニオスの地位は，レオン＝トルニキオスのそれと比べて，格段に強められていたのは間違いないだろう。

ただ，それにしても，有力者たちの意見の一致は，当初から何の支障もなく形づくられたわけではなかった。アドリアノープルでは，ブリュエンニオス家の伝統的なライヴァル，タルカネイオテス家が当初，抵抗の姿勢を示している。しかし，市内で完全に孤立し，期待していた都からの援助も得られなかったタルカネイオテスは，長く抵抗を続けることができなかった。彼もまた，ブリュエンニオス家と婚姻同盟を結ぶことで，反乱者の陣営に加わった。それは，有力な二つの家門を競いあわせ，アドリアノープルの貴族勢力の動きを規制しようとする皇帝政府の政略の破綻を示す出来事であった。

他方，ライデストスのヴァタツェナも，ミカエル＝アッタレイアテスの激しい反発に直面しなければならなかった。アッタレイアテスは小アジアの町アッタレイア出身で，首都の司法官を本業とするいわば他所者だったが，ライデストスの町には，この他にも複数の在地，あるいは新来の有力者が存在していたのである。たとえば，アッタレイアテスがこの町にもつ屋敷と地所自体，もともとは彼の妻の伯母，ボーボス家の女性が所有していたものだった（P. Gautier éd., *La diataxis de Michel Attaliate*, Paris, 1981, pp. 25–29, 45）。同家は，10世紀末のテッサロニケの有力市民，マギストロスのパウロス＝ボーボス（Scylitzes, p. 343）に連なる家系と思われ，いずれかの時に彼の子孫の一人がライデストスに移り住んだのだろう。この他にも，アレクサンドリア出身の占星術師でマギストロスのシュメオン＝セス（Gautier éd., *Le typikon du Pantocrator*, p. 115 ; *La diataxis de Michel Attaliate*, p. 127）。や，旧ブルガリアの王侯の末裔ネストンゴス（Gautier éd., *Le typikon du Pantocrator*, p. 115）といった多彩な人々がこのライデストスに館をもっていたことが知られている。それゆえ，町の最大の有力者であるヴァタツェナにとっても，こうした他の有力家門を懐柔し，その大多数を味方にしない限り，町を牛耳ることはできなかったのである。

さて，町が完全に反乱派に制圧されると，いよいよ挙兵という段取りとなる。

トラヤノポリスでニケフォロス＝ブリュエンニオスを皇帝として歓呼した軍勢は，意気高くアドリアノープルに入城し，さらに軍議の結果，ヨハネス＝ブリュエンニオスの指揮下に軍を首都攻囲のために差し向けることが決定された（Attaleiates, pp. 249 f ; Bryennius, pp. 231–233）。彼らは，国家権力の奪取という反乱軍の最終目標を達成するための第一歩を踏み出したのである。

一方，ライデストスでは，ブリュエンニオスの歓呼の後，叛徒の行動は，穀物取引所の破壊に始まり，パニオンの町の攻撃，自らの町の要塞化と反対勢力の家財・地所の掠奪へと向かった。ここでは，国家に対する反抗が，局地的なパースペクティヴのなかで実行されているのが看取できるだろう。

以上，見てきたところをまとめておけば，第一に確認できるのは，トルニキオスの乱と比べ，今回，叛徒のマケドニア軍事貴族が地域社会に占める地位が格段に強化されていることだ。貴族家門相互の連帯は緊密化し，また彼ら貴族層が団結すれば，地域社会全体を統率しうるほどの能力を彼らは備えていた。しかし，その反面，そうした彼らの能力は，彼らの家産組織自体の実力に基づく，というよりも，むしろアドリアノープルに駐屯する帝国正規軍の指揮権を押さえ，正規軍将兵の支持を確保したところが大きかったことも事実だと思われる。ヴァタツェナが反対派を抑圧するのに，反乱軍の力を借りねばならなかったこともそれを例証している。反乱に加わった将兵は，おそらくアドリアノープル，およびその周辺のトラキア・マケドニア地方で徴募され，長年にわたりブリュエンニオスの指揮下で戦ってきたために彼に強いシンパシーを抱くようになっていたのは間違いないところだろう。しかし，彼らがブリュエンニオスの私兵ではなかったことは，前述したごとく，彼らの代表が待遇改善を訴えるために都に上っていることからもわかる。彼らは，国家によって給養された国軍兵士だったのである。バルカンの貴族勢力が小アジアの同輩に対してこの時期，優位に立ったのは，トルコ人の侵攻で属州軍事組織が崩壊した後者と比べて，強大な正規軍部隊を手中に

していたためといえるだろう。そして，こうした国家に給養された国軍兵士を支持基盤にするがゆえに，中央政府の圧政に反発したマケドニア貴族は，分離独立を希求するよりも，むしろ自らが国家権力を掌握することを目指して，都に攻め上がろうとしたのである。

ところが，皇帝ミカエル7世を権力の座から追い落としたのは，強大な軍勢を擁するニケフォロス＝ブリュエンニオスではなく，わずかな手勢しかもたなかったものの，巧みに首都の人心を味方に付けた小アジアの貴族，ニケフォロス＝ボタネイアテスだった。1078年4月3日に都に入った新皇帝ボタネイアテス（ニケフォロス3世，在位1078-1081）は，ブリュエンニオスとの妥協を図り，和平交渉を進めた（Attaleiates, pp. 284-288 ; Bryennius, pp. 259-265)。しかし，結局，交渉は決裂，反乱軍はカラブリュエの野でアレクシオス＝コムネノスの率いる皇帝軍との決戦に臨む。この戦いにおいて反乱軍は，兵力，練度共に皇帝軍を大きく上回っていたにもかかわらず，皇帝方にトルコ人の援軍が到着したこともあって大敗を喫し，大将のニケフォロス＝ブリュエンニオス自身，敵の捕囚となった。彼はその後，刑吏に委ねられ，眼球を抉り取られた（Attaleiates, pp. 288-292 ; Bryennius. pp. 265-283)。反乱は事実上，ここで頓挫した，と言っても過言ではないだろう。

ところが，その後の展開は瞠目すべきものだった。勝敗が決したとき，ニケフォロス＝ブリュエンニオスは，戦場を離脱しようとしていた息子に向かって，アドリアノープルを守る彼の祖母と母親に，戦場から戻った兵士を集めて防備を固め，皇帝が全員の名誉と財産を守ることを約束した書状が届かぬ限り，安易な妥協をするな，と伝えさせた。事態はまさに彼の語った通りに推移する。皇帝軍総司令官アレクシオス＝コムネノスがアドリアノープルを開城させるには，叛徒側の要求を全面的に承認したニケフォロス3世ボタネイアテス帝の黄金印璽文書を持参する他なかったのである（Bryennius, pp. 281-283)。こうした，ブリュエンニオスの反乱の幕切れは，まさにトルニキオスの乱とは対照的だ。反乱の夢が破れたとき，レオン＝トルニキオスが一族縁者にさえ見捨てられ，惨めな姿をさらしたのに対し，ブリュエンニオスの反乱では首謀者ニケフォロスが捕えられた後ですら，叛徒側は団結を維持して，皇帝側の譲歩を引き出し，事実上，決起以前の名誉と財産を保全した上で矛を収めることができたのである。

両者の運命の別れ目は，いかなる点に求めることができるのだろうか。

まず第一に，それは，都の皇帝が動員できた軍事力の差に起因するものであったのは確実である。トルニキオスの乱の際，皇帝コンスタンティノス9世は，強力な小アジアの軍勢に頼ることができた。彼らの来援と同時に，反乱軍は脆くも瓦解したのである。一方，ブリュエンニオスの反乱の際には，トルコ人の小アジア席巻によって，小アジア属州軍は見る影もなく衰弱していた。そのことは，アレクシオス＝コムネノスの率いる皇帝軍が反乱軍と比べて著しく劣勢だったことが物語る通りである（Anna Comnena, I, p. 19)。もしも，ブリュエンニオスの反乱軍がアドリアノープルに立て籠って抵抗したならば，皇帝軍にとって苦戦は必至だっただろう。

しかし，そのこと以上に銘記すべきことは，ブリュエンニオスの反乱の過程を論じるなかで再三，指摘したように，マケドニア貴族層内部の団結力と，彼らが地域社会に及ぼす支配力が着実に強化されていたことである。トルコ人に本領を荒らされ，存立の基盤を失いかけていた当時の小アジア貴族と比べれば，地域社会と属州駐留軍に深く根を下ろしたマケドニア貴族たちの安定感はいっそう際立ったものに映る。彼らは，滅亡の瀬戸際にあった当時のビザンツ帝国において最大の実力をもった社会集団だったと言えよう。

V　コムネノス政権への統合
——結びにかえて——

11世紀のアドリアノープルで勃発した2度の属州反乱を比較して，地域社会に対する貴族層の支配力の伸張の度合を検証する，という本報告の所期の目的は，以上でひとまず達成されたのではなかろうか。最後に，その後のマケドニア貴族たちの運命を見届け，彼らが帝国再建の支柱に転じる過程を概観して，今回の報告の結びに代えたいと思う。

ブリュエンニオスの反乱が終息した後，マケドニア貴族と中央政府との間は，相互不信と緊張を秘めた微妙な関係がしばらく続いた。アドリアノープルに入った西方軍総司令官アレクシオス＝コムネノスは，新たに勃発したニケフォロス＝バシラキオスの反乱を鎮圧するための兵を募った。ところが，この作戦行動に参加したことが知られているマケドニア貴族は，バシレイオス＝クルティキオス（Bryennius, pp. 293–295）のようにブリュエンニオスの反乱には参加したものの，同家とは縁戚関係が確認できない者や，レオン＝トルニキオスの一族と思われるペトロス＝トルニキオス（Bryennius, pp. 291–293）のように，概してブリュエンニオスの反乱時にはその周縁部に位置したと思われる者ばかりなのだ。一方，アドリアノープルの他の有力者たちは妻子を伴って都に上り，皇帝に謁見している（Bryennius, p. 285）。このとき，ニケフォロス＝ブリュエンニオスの弟ヨハネスが，彼に恨みを抱くヴァリャーグ近衛兵に殺害される，という突発事件が起きている（Scylitzes Continuatus, II, ed., I. Bekker, Bonn, 1839, pp. 737f）が，このことからも都に上った一行のなかにブリュエンニオス家やタルカネイオテス家など，反乱に中心的に関与した家門の成員が含まれていたことが窺い知られるのである。皇帝政府は，反乱の中心人物とその家族を首都に拘束して事実上の人質とする一方，反乱に深く関わらなかった貴族たちを積極的に軍に編入して，内外の敵にあたらせようとしていたのである。

同様のマケドニア貴族分断策は，1081年，西方軍総司令官アレクシオス＝コムネノスがニケフォロス3世を反乱の末に打倒して，皇帝権を奪取した後も続いた。新たに西方軍総司令官に就任したグレゴリオス＝パクリアノスは，アドリアノープルに入ると，ニコラオス＝ブラナスを副官に起用したのである（Anna Comnena, I, p. 151）。アレクシオス＝コムネノスの配下のペトロス＝トルニキオスにせよ，今回のニコラオス＝ブラナスにせよ，いずれもかつてレオン＝トルニキオスの反乱に与し，反乱が失敗に終わった後，勢力を失墜させ，ブリュエンニオス家の後座を拝することになった家門の成員であるのは見逃せない。アレクシオス＝コムネノスらは，こうした旧トルニキオス派の貴族家門を，ブリュエンニオス派の対抗勢力となるように，意図的に引き立てていたのである。ここに見られるのは，マケドニア貴族内部を競合する派閥に分断し，総体としての彼らの無力化を図ろうとする昔ながらの戦術であった。しかし，こうした方策が極めて不安定でほころび易いことは，これまでの経緯からも明らかだったはずである。

転機は1086年に訪れた。この年，西方軍総司令官グレゴリオス＝パクリアノスとその副官ニコラオス＝ブラナスは，ペチェネグ人と戦って，共に戦死を遂げたのである（Anna Comnena, II, pp. 82f）。アレクシオス帝にとって，この事件は，即位以来の対アドリアノープル政策を見なおす機会を提供したはずだ。というのも，パクリアノスの西方軍総司令官職就任は，アレクシオスが反乱の兵を挙げる際，前者の協力を取り付けるために約束したもの（Anna Comnena, I, pp. 73f）であり，皇帝としても彼を簡単には解任できなかったからである。翌1087年には，出征中のアレクシオス帝の陣中に盲目のニケフォロス＝ブリュエンニオスが登場する（Anna Comnena, II, p. 90）。両者の間には雪解けのムードが漂いはじめたようだ。

そして，決定的な事件が1095年に起こる。この年，帝国領内に侵入したクマン人の軍勢がアドリアノープルに向かっているのを知ったアレクシオス1世は，アドリアノープルの主だった市民全員を呼び出し，彼らに町の防衛を委ね，それが成功した暁には多額の褒美を授ける旨，約束した。その際，町の防衛の最高責任者には，ニケフォロス＝ブリュエンニオスが就けられたのである（Anna Comnena, II, pp. 193f, 197）。この措置は，皇帝がアドリアノープルの防衛を，ニケフォロス＝ブリュエンニオスをリーダーとするマケドニア貴族たちの自主的な努力に委ねたことを意味した。アレクシオス帝は，ブリュエンニオスがアドリアノープルにもつ隠然たる権威を追認し，そのうえで彼の協力を取りつけようとしたのである。皇帝は，小手先の分断策から訣別し，アドリアノープルに現存する権力構造とマケドニア貴族が地域社会にもつ既得権益をまるごと承認することで，彼らの支持を確保する方針に転じたのであっ

た（cf. M. Angold, *The Byzantine Empire 1025–1204 : A Political History,* London, 1984, p. 130)。

その後，ブリュエンニオス家とアレクシオス1世政権との関係は，急速に親密なものになった。1097年までに，皇帝の長女アンナと，ニケフォロス＝ブリュエンニオスの孫で同名のニケフォロスが婚約し，両家は婚姻の絆で結ばれることになる（Anna Comnena, II, p. 223)。この後，ブリュエンニオス家の成員は，デュラキオンやテーベのドゥクス職を占め（Bryennius〔編者 P. Gautier の解説〕pp. 19, 23 ; A. Kazhdan, "Bryennios", in *The Oxford Dictionary of Byzantium,* pp. 328f)，コムネノス朝の西部属州防衛に積極的に貢献した。

他方，これより前，1082年に皇帝は，ヴェネツィア人に黄金印璽文書を交付，帝国全域における自由交易を許可している。交易が許された都市のなかには，アドリアノープルとライデストスの名も見い出される。皇帝は，ライデストス穀物専売政策のような集権的志向を捨て，属州貴族が彼らの所領で生産された余剰農産物を自由にヴェネツィア商人に売却するのを認めたのである。それによって皇帝は，経済の面においても，彼らの既得権益を守り，さらにそれを積極的に増進させる姿勢を示したのであった（拙稿「ビザンツ貴族と皇帝政権」32–39頁を参照)。

かくして，アレクシオス1世は，マケドニア貴族たちの所領経営者としての欲求を満足させ，さらに，ブリュエンニオス家を中心にした彼らの地域支配の現実をありのままに受け入れることで，彼らの支持と忠誠を取りつけ，彼らに政権の一翼を担わせることに成功したのである。ただし，地域社会を牛耳る属州貴族の既得権を認め，彼らが半ば自立的な勢力たることを容認したうえで彼らの支持を得る，というコムネノス朝の皇帝たちの戦略は，皇帝権の威信が低下した場合，常に国家分裂の危険を内包するものでもあった。そうした危惧は，やがて12世紀末に現実のものとなる。しかし，それについての議論は今回の報告の範囲を越えており，他日を期して，いまはここで擱筆せざるをえない。